07387069

徳島における水泳のルーツを探る
-近世における水上活動の実態とその変遷-

教科領域教育専攻
生活・健康系(保健体育)コース　　指導教員　松井　敦典
篠原　健真

第1章. 研究の目的

水泳は，小中学校においては，必修の授業内容である。また日本のような四面を海に囲まれ，河川湖沼が多いといった地理的特徴をもった生活環境において，水泳能力は必要不可欠なものである。松井・南(2007)によると，徳島県出身の大学生は大学入学までの間に，学校で十分な指導を受けていない。沖田(2002)らの報告によると，徳島県は香川県に比べて，小学校教員の水泳能力が低い。このように,徳島県の学校で,十分な水泳指導がなされていないことは，教育・社会的問題であると言える。このような水泳への取り組み方が地域によって違うのは，日本泳法のような古来より受け継がれてきた水泳文化の継承の有無が関係しているのではないか。徳島に徳島藩流の泳法が伝承されていない原因には，何か歴史的背景や経緯があった可能性がある。

そこで，本研究では，現在十分に継承されていない徳島県の水泳文化の起源を過去の文献・現地調査･インタビュー調査より史的に考察し，今後，学校水泳を含めた，水泳教育・水泳文化の継承・発展にいかすこととした。

第2章. 日本の水泳の歴史

現在保存されている日本泳法の流派は，水軍を発祥としたものと幕府や藩主の奨励により確立されたものが主であるが，その原型は，軍隊の水泳術であった。戦いで勝利するために,様々な戦法・戦術を編み出し，海や河川などの地形的特性を活かした戦法をとる武将も現れ，水軍の力の差が勝敗に大きく影響した。それに伴い，水泳の必要性も増した。また，立身出世のためにも水泳は必要であった。

徳島藩流の泳法を保存するための重要人物は,藩の水軍大将であり，大坂冬の陣で，戦功者10人に与える感状のうち2つを与えられ，天下に名を轟かせていた森氏である。蜂須賀氏は森氏の活躍を評価し，現在の阿南市椿泊で水練をさせるよう命じている。しかしながら，泳法に対する具体的な資料は明らかでない。

第3章. 水軍と海人の関係についての可能性

森氏が本拠としていた椿泊の沖に，伊島という島がある。そこは,海士のいる漁師町であり，森甚五兵衛も伊島の海士のアワビ獲りを見物に来たこともある。そこには，優秀な海士の存在があった。伊島の歴史について詳しい神野氏は，「伊島の海士は非常に優秀で，その潜水技術により，大坂の陣において活躍した。また，森水軍の水練は伊島の海士が重責を担った」と語っている。伊島に代々伝わる水泳の指導方法も存在している。

第4章. 徳島の古式泳法

徳島藩は，全国に名が轟く程の強力な水軍を持っていた。これ程までに強力な水軍が，泳ぐ技術を持っていなかったのか。当然，潜って敵船を攻撃したり，水中の障害物を除去する作業

をしたりという戦法や，船の補修作業で水中に入ることはあったため，泳ぐ技術を持っていなかったとは考えづらい。では，なぜその技術が継承されないままに，現在に至っているのか。

まず一つ目の要因として考えられるのは，水軍を取り仕切った森家をはじめ，水主や船頭役といった役職の人たちが，水泳技術の保存に対して積極的でなかったということである。実際に行なった具体的な水練の内容は，実際に水練を行ない，指導していた水主達にしかわからない。その水主たちが，文書としての記録をしなければ，水練の必要性がなくなったとき，その水練について知る者がいなくなれば，水練の歴史も内容も途絶えてしまう。当時の阿波藩では，体が大きく，力の強い者が出世し，またそれに伴って熱心に訓練に励むことが奨励された。このような環境下において，水練を文書に残す作業が果たして行なわれたのか。日夜，訓練に明け暮れていた者たちに，森家や藩主からの命令なしに，自ら記録に残すような作業をする時間的余裕はなかったのではないか。藩主蜂須賀公は，森家に水練の全てを任せていたと考えられる。森家も元海賊であり，文化的な史料を残すということに積極的であったとは考えづらい。たとえ，戦法や戦術に関する書があったとしても，強力であった水軍の戦術書は，現在もなお，秘伝として隠密に保存されている可能性も高い。

森水軍の力が，あまりに強大で，熱心に訓練に取り組む気風を持っていたからゆえに，水練に関する記録が残っていないのではないか。

もう一つの要因は，藩としての水練は行なわれていなかったということである。徳島は，古くから海人と呼ばれる人たちがいた。この海人の存在が，水練の必要性をなくしていたのではないかという説である。森家が水軍の将となり本拠をおいた阿南市椿泊沖には，伊島という海士の住む島がある。森甚五兵衛が伊島まで，海士がアワビを採る様子を見物しに行っている程であるから，潜る技術も高かったと考えられる。この伊島の海士の存在が，藩としての水練を行なわなかった最大の要因であると考える。森水軍が活躍したと言われる大坂冬の陣や，大坂城再建に伴う石垣の運搬など，これら全てに伊島の海士が関わっており，その恩賞として伊島灘周辺一帯の漁業権を得たという伝説が伊島には残っている。つまり，森家は，水練のうちの操船術や航海術に力を入れ，実際に水中での活動は，伊島の海士を借り出して任せていたと考える。伊島が，男性が潜る地域であったことや，伊島独自の水泳指導法が存在したことも，この説を示す有効な情報であると考えられる。

第5章．今後の展望

今回の研究では，徳島で行なわれていた水練の実態を詳細に至るまで明らかにすることはできなかった。しかし，当時の水軍を取り巻く環境や，地域の歴史情報をインタビュー調査によって得られたことは収穫であった。

徳島の水練が明らかになることにより，地域に根ざした水泳文化が再興され，学校体育や社会体育の場面で取り組まれることが期待できる。

特に，学校体育においては，水泳の持つ本来の意味や目的を指導することができ，自分の地域の歴史文化を学ぶという社会科の要素も含んだ，総合的な指導内容として取り扱うことの可能性も見出せる。徳島独自の水泳指導プログラムとして，地域の特色に合わせた指導ができることは，文化的にも価値があることである。

今後、徳島の古式泳法を引き続き調査するとともに，徳島県の水泳についての歴史をまとめることも課題の一つとしたい。